

# ムスタファの夢



クルドの踊りを楽しむムスタファと姉妹。左がムスタファ

二〇一一年一月、チュニジアに始まった民主化運動は、またたく間にアラブ諸国に飛び火し、革命へと導きアラブの春と呼ばれた。シリアでも二〇一一年三月から民主化運動が始まったが、三〇年も続く独裁政権の力は強く、三万人以上にものぼる人々が命を落とした。革命には遠い状態が続いている。

二〇一二年二月、多様な自然環境に生きる人々の生活を撮影するため、シリアの首都ダマスカスに降り立った。現地では民主化を叫んだデモがさかんに起こり、政府側の軍隊や警察と、民衆とが衝突して死者が出ていた。そんな状況を報道するために戦場カメラマンが世界中から集まってきた。「一台のカメラは銃より強い」と、イギリス人フォトグラファーのジョンは話した。「シリア政府は銃を恐れないが、カメラを恐れる。なぜなら写真は人々の眼に広がり、世界を変える力を持つからだ」と。戦場カメラマンの話を聞くうちに、私は状況がどのように変わろうと、人々の営みが続いている姿を見つめていたいと思うようになった。日常を送りながらこの土地に生きなければならぬ人々の生活のなかにこそ、戦争の深い姿があると思ったからだ。

四月、情勢は悪化していったが、街に出ると生き生きとした人々の生活があった。これまで撮影を通じて知り合った友人たちと連絡をとり、圧政下のシリアでどのように日常を送っているのかを訪ねた。友人の多くは、反政府勢力として様々な民主化運動に関わっているようだった。

ダマスカスの街を見下ろすカシオン山のふもとに、友人の住む家があった。地方の街からダマスカスに集まってきた友人たちは、お金を節約するために九人で小さな部屋に共同生活をしていた。ほとんどがこの内





共同生活をする家で昼食をとる友人たち



カシオン山で花を売る男



ダマスカス、カシオン山の夜景

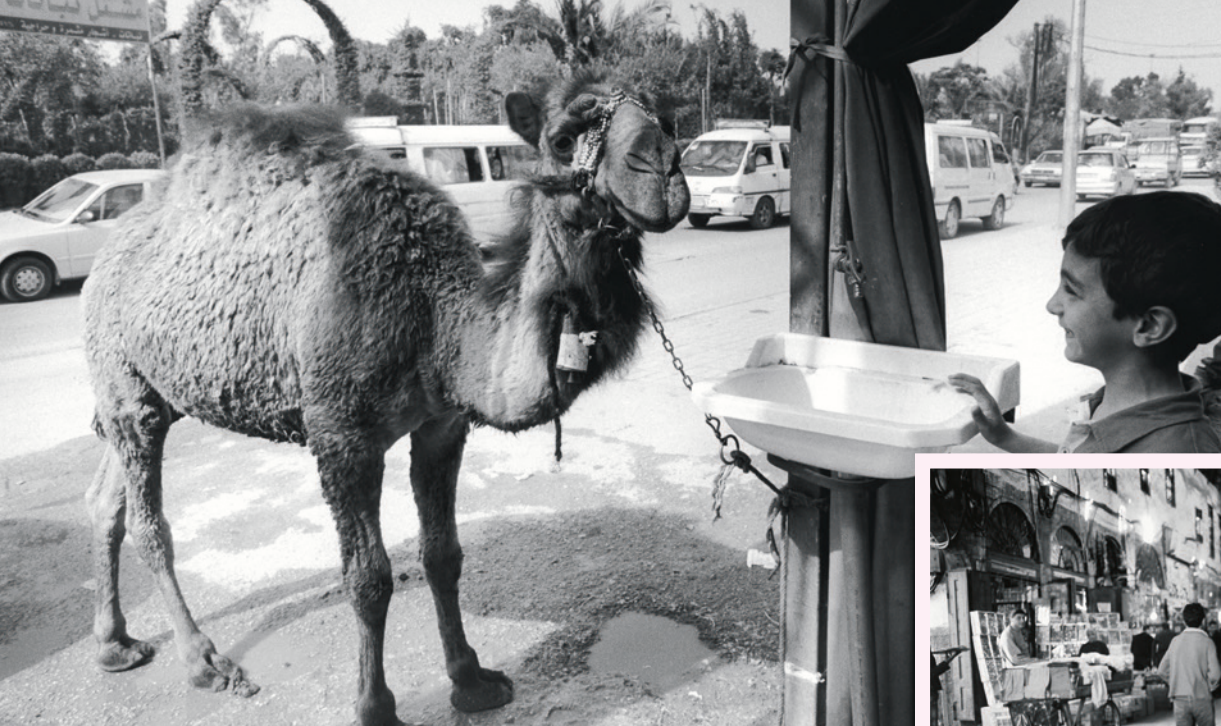
戦によって失業中だったが、なかには政府軍の兵士もいれば、脱走兵もいた。さらには民主化デモに参加した罪で警察に追われ、潜伏のために逃げてきた若者もいた。彼はここで、反政府軍に武器や薬品を送る活動をしていた。「もし警察に捕まったら、拷問を受けて一日に一〇回死ぬだろう。それよりも、自分の正義のためにただ一回死にたい。最後は殺されるのではなく、自分から死に行く」その言葉は重かった。

政府軍の兵士であるムスタファは、シリア北部の街ハツサケの出身で、徴兵中のためこの家から毎日軍の施設に通っている。大学を卒業している彼は、その教養をかわれ、軍の上官として特別な任務を担っているそう。そのムスタファに兵役を終えた後の夢について聞くと、「シリアを出ること」だと答えた。彼は一年半の兵役の義務期間を終えたにも関わらず、さらに六カ月も徴兵されたままだった。内戦が始まってから大量の脱走兵が出ていることに悩んだ政府軍は、活発化する反政府軍に対抗していくためにも、兵役が終わった兵士にお金を払って軍隊につなぎ止めていた。

「給料は嬉しいが、休みがもらえず1年近く故郷に帰っていない。民衆と政府が戦っている今、一体何のために兵士をやっているかも分からない」徴兵されて政府軍に入ったために、民衆に銃を向けなければいけない矛盾に彼は苦しんでいた。

「もはやこの手で政治を変えることはできないから、自分の人生を変えるだけだよ。それにはまずこの国を出ることだ」彼は政府軍の上官でありながら反政府感情が強く、自分の給料からパン、砂糖、お茶を買って、激戦地ホムスから避難してきた人々に





肉屋の前につながれた  
子ラクダに喜ぶ子ども



菓子売りの老人



肉屋がならぶ市場

配る活動をしていた。「僕は政府に対してではなく、人々に対して何かをする。それが僕にとつての革命だ。ユカ、銃で平和をつくることはできない」ムスタファは叫んだ。

五月、爆発や銃撃戦がダマスカスでも頻発し、情勢はますます不安定になった。逮捕される友人も出始め、捕まるよりはと、激戦地のホムスで反政府軍の兵士になる友人もいた。皆、自分たちの手でこの国を変えるのだという、強い信念に生きていた。

「アッラー（神）は偉大なり！ アッラーは偉大なり！」ダマスカス中心部の大通りでは毎週激しい民主化デモが起き、大通りや広場では、人々は神の名を叫び、正義を訴えた。毎回警察や軍隊による銃の乱射を受け、多くの死傷者を出しながらもデモは止まらず、子どもから老人、男も女も、大通りに押し寄せ、怒り、泣き、叫んだ。抑圧され、人間の権利

を奪われてきた人々の叫び。それは鳥肌がたつような光景だった。本当の自由とは何か、人間の尊厳とは何か、人々は体ひとつで訴えようとしていた。明日何が起こるのか分からない不安のなかでも、人々は「今」を生きていた。

五月末に日本に帰国してからも、私はダマスカスの友人たちと連絡をとり続けた。八月、ムスタファから突然電話があった。「軍隊から逃亡し、国境を越えてトルコの難民キャンプにいる」彼は興奮し、嬉しそうだった。そこでの生活は、固いパンとジャガイモの食事が一日に一度出るだけで、医療施設も十分な電気も無いという。それでもここはシリア国内よりもましだと。「ただ普通の、人間らしい生活を送りたいんだ。それが夢だよ」彼は明るく語った。「僕はいまシリアを出たんだから」と。その喜びの声を聞いてからまもなく、彼と連絡がとれなくなった。

——一月半ば、深夜に電話が鳴った。出てみるとムスタファだった。「自分は今、シリア国内で銃を持って戦っている。反政府軍の兵士として」あまりの驚きに声が出せなかった。銃で平和をつくることはできない、と彼は断言していたはずではなかったか。

「銃で世界を変えることはできないと思っていた。銃を手取るよりも、自分の人生を生きたかった。だが今は、銃の力を信じるようになった。銃でしか変えられないことがある。これが現実だ」「死ぬべきときが来たと感じる。正義のために戦って死にたい、それが今の僕の夢だ」ムスタファは沈黙し、そして電話の向こうで嗚咽した。「僕は行かなければいけない。どうか元気でいてほしい。いつか、またどこかで会おう」そして電話は切れた。ムスタファ



が死を覚悟していることを強く感じた。別れの言葉をいうために、彼は電話してきたに違いなかった。日本は夜中の三時、目が冴えて再び眠ることができなかった。

ムスタファは、人生を変えることを願って国境を越えたが、そこに彼の夢を見出すことができなかったのだ。大学で国際ジャーナリズムを学び、銃で平和をつくることはできないと公言していた彼が、「銃でしか変えられないこともある」と考えるようになったのは、悲惨な現実への大きな失望があったはずだ。銃を手にするまで、どんなに彼が苦しんだか、彼のはじけるような笑顔を思い出し、涙がでた。

多くの若者が、自分の夢に生きることをあきらめ、あるいは夢に生きる道をつくるために、武器を手にとり、戦場へと戻っている。平和や歴史を築きあげていくのは、安全な場所で繰り広げられる言葉や政治よりも、夢があった若者の血であり、苦しみであるのかもしれない。人間の歴史の悲しさだった。

この世界には多様な価値観があり、人生の形がある。けれども、人と人とはつながって互いの人生を知ること、同じ痛みと幸せを共有することができるはずだ。そしてその小さな結びつきが少しずつ、でも着実に、世界を動かしていくのだと信じている。言葉や宗教や政治を越えて、私たちは、同じ時代に、同じ人間として生きているのだから。

広場の金魚売り



市場で袋を売る少年たち



ジャガイモを売る家族